

開発経済学と「格差の限界」

野上裕生

特集／開発の中で「格差」を考える

『成長の限界』という本が大きな注目を集めたことがあった。この本は環境資源の制約と人間社会の経済活動との拮抗に注目し、現在の経済成長重視の思潮を批判したものであった。

それでは「格差の限界」はあるのだろうか。これまで開発経済学において格差は様々な形で注目されてきた。もともと開発経済学の起源が先進国と開発途上国の所得格差の是正という一面を持っていた。そこで、開発経済学の歴史の中で「格差」がどのように考えられてきたのかを「社会が許容できる格差の限界」という問題に注目したハーシユマンの考察を紹介しながら考えてみたい。

●「格差」の多面性

日本語で「格差」というタイトルの本や論文は大部分、格差は是正した方がよいものだ、という問題意識を背景に持っていることが多い（たとえば参考文献③）。筆者も格差はできるだけなくしていく方がよい、と考えている。しかし、同時に筆者は、格差というものの持つ様々な意味を見ないこ

ともよくないと思っている。たとえばある国が工業技術で優れた成果を収めていると、ほかの国に学習機会が与えられる。もちろん最近の知的所有権保護の動きは開発途上国の学習機会にも無視できない影響を与えるかもしれないが、知識の違いものが関わりあうことで学習は生まれる。またある地域が地場産業の育成や都市の再開発に成功すれば、それを手本として自分の地域に役立てる、ということもある。このように、格差は時には発展で重要な機能を果たすこともあるのだ。たとえばアレクサンダー・ガーシエンクロンという経済史家の研究以来、「後発性の利益」と呼ばれるアイデアがある（参考文献⑦等参照）。これは、「後発」という逃れることのできないハンディを負った国にも、先発国の経験を生かすことは可能であり、先発国のように工業化向きの様々な制度が形成されていなかったという制約から自由に、新しい発展への道筋を開拓できるのではないか、という逆説に注目したものであった。

発展への影響を別にして、格差を社会的公正や不正義の問題と捉える立場にとって

も、格差の意味合いは単純ではない。たとえば格差を分配の不平等、搾取の問題と捉え、不正義として告発してきたマルクス経済学でさえ、「格差」の意味は単純ではない。マルクス経済学では生産手段を独占している資本家が労働者を搾取して獲得した剰余価値が格差の源泉であった。ところで剰余価値には絶対的剰余価値と相対的剰余価値がある（参考文献⑤、一七二～一七五ページ）。絶対的剰余価値は生産手段の所有者である資本家が労働者の生産物の一部を獲得することであり、生産手段の独占・集積による資本家権力の存在を意味している。しかしこれだけでは全ての社会にあることで、たいした剰余価値は生まれない。

近代工業社会（資本主義社会）に特有な現象は、資本家相互の競争によって技術革新が不断に発生し、労働者の生活必需品の価値が低下し、労働者の生計費として必要な生存賃金が低下することによって、相対的に資本家の分配分が増加する相対的剰余価値の方であった。この場合には、資本家と労働者の格差の拡大は、一面では生産手段の独占と集積を意味すると同時に、他面



特集／開発の中で「格差」を考える

は大きな剰余価値を生み出すことが可能なほどの労働者の生産性の高さ、近代資本主義社会の生産力の高さをも示すものであった。

たとえば格差が悪いものだとしても、それを是正する過程で、別の格差を容認してしまふ可能性もある。たとえば豊かな資本家や地主から財産や土地を取り上げて、労働者や農民に与えようとすれば、それは再分配のための政策介入を行う政府や国際機関などと、政策の対象になる人たちとの間の力の格差を容認することになる。「神の前の平等」、「法の前の平等」という言葉そのものが、神や法の権威を受けた人とそうでない人との格差を認めているのである。

またある種の格差を是正しても、他の種の差異が「格差」として新たに注目されるということもあるかもしれない。たとえば社会学者のジンメルは、ある差異に対する印象や反応を規定するものは、その印象や対象の絶対的な大きさではなく、その差異の印象の他の印象に対する違いにあるので、差異に関する感覚が目覚めると、差異は減少しても、そこから発生する印象は減少しないと考える。ある人が他の人間と他の点で共通するところが多ければ多いほど、それだけ鋭く特定の部分で他人と自分との相違を感じることも多いかもしれない。したがって、たとえば社会主義のような格差の全面的な是正対策を行っても、人間が作り出す文化と差異が廃棄されることは決してな

い、とジンメルは考えるのである（参考文献②、四六四ページ）。

●格差に対する社会の寛容さ

建前として「平等」を誰もが受け入れられる一方で、格差のもつ意味や影響は様々である。また開発経済学では格差の是正は様々な政策目標の一つに過ぎず、実際には目標の中で効率と平等（格差是正）に与えられ比重も循環的に変化してきた。たとえば一九五〇年代の開発経済学はもっぱら所得成長に重点をおいてきた。しかし当初の開発への期待は失望に変わり、一九六〇年代末には平等、雇用、あるいは「自立」というテーマが注目されるようになった、という具合である。また「成長」を訴えてきた人々と「平等」を訴えてきた人々は、互いに別々というわけではなく、成長と平等に関心を持つ人が重なっていることも多い。言い換えると、社会が不平等に寛容になる局面と不寛容になる局面が交互に表れるということになる。この問題に興味を持ったのがハーシユマンである（参考文献⑧）。

ハーシユマンは一九五〇年代の開発経済学の楽観的な見方は、ある程度は、開発途上国の中に実際にあった開発への期待を反映している、と考える。この期待が裏切られたことが、社会を不平等に対して不寛容にさせるのである。ハーシユマンは同じ方向に走る二車線のトンネルの例を持ち出す。トンネルの中で自分の車が渋滞に直面し、

トンネルを抜け出せない状況が続いている。あるときに、自分がいる車線とは別の車線にいる車が少しずつ動き始めると、「自分の車線もやがて車が動きだしてトンネルを抜け出せるかもしれない」という期待を感じる事ができ、当分は渋滞に苛立つことも少なくなる。このようにして、他人の境遇や成功が自分の将来の境遇に良い知らせを与えることをハーシユマンは「トンネル効果」(tunnel effect)と呼んでいる。ハーシユマンは人間行動が現在と将来の自分の境遇（たとえば所得は境遇の一つの指標である）に依存する、と考え、この将来の境遇に指針を与えるのが同じ時代の他人なのである。この「トンネル効果」は他人の成功が自分にプラスの効用をもたらすことを意味するが、これは利他的動機によるものではなく、純粹に利己的な損得計算によるものなのである。しかし将来の自分の姿を他者に見出すといってもそれにはさしたる根拠があるわけでもなく、その期待が裏切られることもある。そして期待が大きければ大きいほど、それが裏切られた時の失望も大きくなる。たとえば一九五〇年代の開発途上国の工業都市が、「成長の極」(growth pole, François Perrouxの言葉)といわれていたのが、後の時期には「国内植民地主義」(internal colonialism)とまで呼ばれるようになることさえあった。トンネル効果は自分と他人が分断されていないような社会で機能しやすいが、同質的な社会

の方が不平等に寛容なのかという点、そうとは限らない、とハーシユマンは考へる。自分と同じような人が成功していても自分が不遇な境遇にあれば、当初の期待は失望に変わり、それは、他者や体制全体に対する激しい敵意に転換していくかもしれない。また社会が閉鎖的であつて、小さな社会に「自分」と「他人」という二者しかない状況では、分配問題の当事者は閉鎖的な二者関係を作り上げ、その結果、「相手の利得は自分の損失」という「ゼロ・サム」状況だと感じてしまふ危険性もある。反対に、言語や階級などで複合的な社会であつても、革命や戦争という共通体験によつて国民統合が促進される場合もある。このようなわけで、不平等に対する社会の態度は変動しやすいものである。ハーシユマンによれば、「トンネル効果」が機能している限りは成長と平等の問題を別々に順々に解決していくことができるが、「トンネル効果」が機能しないと、そのような段階的接近方法は不可能である。また「格差」、「不平等」に対する人々の感情は非常に移ろいやすいものであり、それを政策当局者も研究者も十分に考慮する必要があるのである。

●国際機関の平等論

最近では世界銀行の『世界開発報告二〇〇六』と国連開発計画の『人間開発報告書二〇〇五』が「格差」や「平等」をテーマにしている。まず『世界開発報告二〇〇六』

は「開発と平等」をテーマにしているが（参考文献①）、この報告書の問題意識は以下のようになっている。

①結果ではなく機会の平等が重要であり、教育や物的資本、労働やリスクに対するインセンティブの供与と両立する形で平等をめぐすべきである。

②所得の平等よりも資産、経済的機会、政治的発言力の平等が重要である。

③政策の次元では、短期的には平等と効率のトレードオフがあるかもしれない。

なぜ「平等」は大事なのであろうか。『世界開発報告二〇〇六』は次のように主張する。不完全な市場では資産の不平等な分配が資源配分の失敗と生産力の損失になり、経済的・政治的不平等は制度発展の不備と結びついているのであるから、開発政策の立案においては、貧困対策において支配勢力の優位性を除くように再分配を行う必要がある、また効率を促進するように再分配を行うためには効率と平等のトレードオフを十分に考慮する必要がある。また、成長向け政策と平等に向けた政策が別々にあると考へるのは正しくない。そして『世界開発報告二〇〇六』は人的能力（教育、医療、リスク、それらを賄ふ資金を確保するための税の問題）、法的制度、インフラストラクチュア、市場とマクロ経済（金融市場、労働市場、生産物市場、マクロ経済の安定性）、グローバルな次元について平等の問題点を論じている。

『世界開発報告二〇〇六』の関心は、市場が効率的に機能する条件として資産や権力の平等を求めるところである。ところで社会の中には、グローバル化や市場の競争に参加したくない人もいるかもしれない。伝統的な生き方を続けたい人もいるかもしれない。市場に依存する程度の少ない人は「低所得」であつても、十分な生き方はできるかもしれない。そのような自由（市場に依存しないで生活する自由）もまた、市場で競争する自由、市場で平等に競争できる自由と同じように尊重されなければならないだろうが、そのような視点は、『世界開発報告二〇〇六』にはあまり入っていないようである。また世界の大局的な流れは国際機関や多国籍企業などによって決められているので、「オーナーシップ」を確保するために「参加」の機会が与えられても、それは、貧困が削減されなかった場合に、途上国の政府や貧しい人たちが自身のせいにして、IMFや世界銀行が責任を回避するのに役立つだけだ、と批判している人もいる（参考文献①、一二〇ページ）。

国連開発計画の『人間開発報告書二〇〇五』は「不平等な世界における援助と貿易安全保障」(International Cooperation at a Crossroad: Aid, Trade and Security in an Unequal World)をテーマにして、平等を尊重する開発協力の必要性を訴えている。『人間開発報告書二〇〇五』によれば、不平等は社会的公正や道徳的観点から見て許容で



特集／開発の中で「格差」を考える

きないだけでなく、貧困層が最初に便益を受ける政策にとっても障害となり、国家の政治的正統性を傷つけるという意味でも許容できないものである。また実際には成長や効率を阻害しないように平等を達成する可能性もあるので、それを最大限考慮して開発協力を行う必要がある。『人間開発報告書二〇〇五』はまた人間の権利や自由は分割できないものであり、ある種の平等の尊重と引き換えに別の種の平等を犠牲にする、ということとは許されないと主張する。(参考文献⑩、pp.52-55)。

その一方で、格差にもかかわらず人間は結びつきを作ってきた。その重要な経路が市場や貿易である。そして格差を是正し、公正を実現するにも、市場や貿易は活用できるかもしれない。フェアトレードと呼ばれる試み(参考文献⑥)はその一つだし、『アジア太平洋人間開発報告書二〇〇六』(参考文献⑨)も貿易を通じて人間開発を実現する様々な提案を行っている。

●社会を見る手掛りとしての格差

本稿は「格差」といわれているものには多様な意味があることを、ハーシユマンの考察を中心に紹介してきた。格差を通じて社会の様々な構造や動きを理解することが可能になる。そして格差に対する社会の寛容の限界も変化するものである。

繰り返し言うが、格差は悪くない、とか、格差はしかたがない、と主張したいの

ではない。「成長の限界」を論じてきた人たちの間でも、地球規模の公正さを問題に取り上げるようになっていく(たとえば参考文献④などを参照)。このような問題意識を有効にいくためにも、どのような格差を、どのような視点から、何を根拠にして是正していくのかについて深く考えてみたいのである。

(のがみ ひろき／アジア経済研究所開発研修室)

《参考文献》

- ① シーブルック、J (渡辺景子訳) 『世界の貧困—一日一ドルで暮らす人びと』青土社、二〇〇五年 (Seabrook, Jeremy, *The Non-Nonsense Guide to World Poverty*, New International Publications, 2003)。
- ② ジンメル、G (石川晃弘・鈴木春男訳) 『社会的分化論—社会的・心理学的研究』中央公論社、一九六八年 (Simmel, George, *Über soziale Differenzierung*, Leipzig: Duncker & Humboldt, 1890)。
- ③ 橋本俊詔 『日本の経済格差』岩波新書、一九九八年。
- ④ メドウズ、Dほか(枝廣淳子訳) 『成長の限界・人類の選択』ダイヤモンド社、二〇〇五年 (Meadows, Donella, Jorgen Randers and Dennis Meadows, *Limits to Growth: The 30 Years Update*, Earthscan, 2004)。
- ⑤ 望月清司・内田弘・山田鋭夫・森田桐郎
- ・花崎皋平 『マルクス 著作と思想—〈現代〉を解く鍵の再発見』有斐閣新書、一九八二年。
- ⑥ ランサム、D (市橋秀夫訳) 『フェアトレードとは何か』青土社、二〇〇四年 (Ransom, David, *The Non-Nonsense Guide to Fair Trade*, Oxford: New International Publications, 2001)。
- ⑦ Gerschenkron, A, *Economic Backwardness in Historical Perspective: A Book of Essays*, Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1962.
- ⑧ Hirschman, A.O., *Essays on Trespassing: Economics to Politics and Beyond*, Cambridge University Press, 1981, pp.39-58 (初出) "The Changing Tolerance for Income Inequality in the Course of Economic Development," *Quarterly Journal of Economics*, Volume 87, 1973, pp.544-565.
- ⑨ UNDP, *Asia-Pacific Human Development Report 2006: Trade on Human Terms, Transforming Trade for Human Development in Asia and the Pacific*, UNDP and Macmillan India (New Delhi), 2006.
- ⑩ UNDP, *Human Development Report 2005*, UNDP, 2005.
- ⑪ World Bank, *World Development Report 2006: Equity and Development*, Washington, D.C.: World Bank and Oxford University Press, 2005.